

共通論題：「女性と経済学」

20世紀初頭のアメリカにおける女性と経済学 —ホーム・エコノミクスを介して

生垣 琴絵

(小樽商科大学)

はじめに

アメリカ経済学史を体系的にまとめたドーフマン (Joseph Dorfman, 1904-1991) は、20世紀の初頭に展開された消費に関する一連の研究を「消費経済学 (Consumption Economics)」と名づけた。この研究領域においては、当時まだ少数であった女性経済学者たちによる活躍が目立っていた¹。

アメリカにおける消費研究の分野は、この「消費経済学」の誕生に先立って、もう一つのルーツがある。それは、消費問題を家庭生活の効率化・科学化と関連させ、家庭生活における様々な問題の改善や解決のための研究や教育を進めたホーム・エコノミクス (Home Economics)²である。これは、19世紀後半から女性たちによって展開された家庭生活に関する知識の教育やさまざまな運動 (ホーム・エコノミクス運動) が、1909年にアメリカ・ホーム・エコノミクス学会 (American Home Economics Association: AHEA) の設立をもって、新たな学問領域として成立したものである。19世紀後半のホーム・エコノミクス運動の一つとして、大学にホーム・エコノミクス (当時はまだ統一した名称がなかったが、ここではこう表記する) コースを設ける動きがあったが³、これに大きな役割を果たしたのが、複数のランド・グラント大学 (国有地交付によって設立された大学) であった。ランド・グラント大学は、地域社会への貢献と、実践教育とを主要目的としたもので、その母体となったモリル法は、農業教育と鉱業教育とを推進するために、連邦政府が各州に約3万エーカーの土地を割当て交付し、この土地からあがる収益をもとにして各州に1校以上の大学を設けようとしたものである。このようなランド・グラント大学の理念に、そこでの女子教育、つまり実践教育として

¹ ドーフマンは、この分野の代表的研究者として、ヘーゼル・カーク (Hazel Kyrk: 1886-1957)、テレサ・シュミッド・マクマホン (Theresa Schmid McMahon: 1878-1961)、ジェシカ・ブランチ・ペイショット (Jessica Blanche Peixotto: 1864-1941) の3名の女性経済学者を挙げた。

² なお、Home Economics は、「家政学」と訳するのが一般的であるが、「家政学」という日本語が必ずしも Home Economics を示すとは言えないことがわかった。さらに、Home Economics と Domestic Science とは、それぞれ示す内容が異なる場合が多いため、明確に分ける必要がある。したがって、本報告では、そのままカタカナで日本語表記するやり方で統一する。

³ このような運動の背景には、1841年に *A Treatise on Domestic Economy* を出版し、自ら女子教育を実践するとともに、女性での家庭の役割を洗練させるための教育の必要性について50年間活動をつづけたキャサリン・ビーチャー (Catherine Esther Beecher) の影響があった。

のホーム・エコノミクスが調和するものだったことから、女性のランド・グラント大学への進学が促されたという背景があった。

しかし、この分野に対する関心が高まり、大学におけるコースや授業科目として、発展していったとはいえ、その内容はアカデミックなものとして洗練されたものではなかった。なぜならば、それは、「女性に高等教育の機会を与える」という意義を強く前面に押し出していたに過ぎなかったからであり、科学的というよりは実用的なものだったからである。この状況から、この分野に関する明確なコースを確立し、体系化することで学問分野として洗練させるための組織が必要とされたのである。それが、エレン・リチャーズが率いたレイク・プラシッド会議が開かれた主要な目的であった。

以上のことを踏まえ、以下では、20世紀初頭のアメリカにおけるホーム・エコノミクス（女子教育）と消費経済学との関連をみることで、この時期のアメリカにおける女性と経済学との関わりを探ってみたい。

I. エレン・リチャーズ (Ellen H. Richards) とホーム・エコノミクス

ホーム・エコノミクス成立に際して、中心的役割を果たしたエレン・リチャーズは、アメリカ女性で初の理学士を取得したことで知られるが、その生涯において取り組んだ研究や社会的な活動のほとんどは、消費研究に捧げられた。例えば、人びとの栄養改善を目的とした施設の設立では、「どんな食品を消費すべきか」ということを示そうとしたし、数々の商品テストの実施は、文字通り「どの商品を消費すべきか」ということを示すための活動であった。リチャーズがホーム・エコノミクスを構想した目的は、女性に対する教育を促進し、消費や生活改善の実践を教育する組織的活動の場を作るためであった。その教育には、女性たちの活躍の場としての「家庭」をいかに効率的にマネジメントするかを考えるための科学的知識の応用が必要とされたのである。

このような考えから、リチャーズは1899年レイク・プラシッド会議を組織する。本報告での関心は、この分野と経済学との関わりであるが、ホーム・エコノミクスという名称にこそその端緒が見られる。したがって、本節ではこの分野の「名称の選択」に関する議論に注目したい。なぜ、**Home Economics** と名づけられたのか、**Economics** という語がどういう意図で選ばれたのか、その意味を探ることで、ホーム・エコノミクスが **Economics** とどう関わろうとしたのかを明らかにしたい。

1899年9月19日、ニューヨーク州北東部の保養地レイク・プラシッドで第1回レイク・プラシッド会議 (Lake Placid Conference) が開かれた。

第1回会議には、15の議題が提出されたが最も議論を呼び起こしたのは、名称の選択についてだった。候補となったのは、ハウスホールド・アーツ (Household Arts) ,

ドメスティック・エコノミー (Domestic Economy) , ドメスティック・サイエンス (Domestic Science) , そして, ホーム・エコノミクス (Home Economics) である。それぞれの語は, 異なる目標と強調点をもち, それぞれに擁護者がいた。このうち第1回会議で選択された名称は, 「ホーム・エコノミクス」であった⁴。それは, 「女性の伝統的領域としての家庭の概念を新しい社会科学の特徴と適切に結び付け, 初期のホーム・エコノミクス運動を作り上げた多様な流れを受け入れ, 歩み寄った」ことを示しているという理由からであった⁵。

当初, エレン・リチャーズは, ドメスティック・サイエンスを支持し, ホーム・エコノミクスの名称には満足していなかった。しかし, ドメスティック・サイエンスは, リチャーズが行なった「キッチン活動」と結びつけてイメージされる傾向があったため, 栄養と衛生を前面に出した印象を持たれがちだった⁶。さらに, 中等教育における少女向けの栄養, 衛生などの科学教育にドメスティック・サイエンスを用いていたことから, リチャーズは, 「学問分野の名称として」ドメスティック・サイエンスにこだわり続けることは難しいと考えたのだった。

その後, 1904年の第6回レイク・プラシッド会議で, リチャーズは, ハウスホールド・アドミニストレーション (Household Administration) もしくは, エコロジー (Ecology) という名称にするべきだという提案をした。「エコロジー」という語は, 遅くとも1873年までにドイツの生物学者エルンスト・ヘッケルによって造られ, 「生物をその環境に照らして研究する科学」として構想されたものである⁷。リチャーズは, 1870年代に, 環境とその内部での生活のためのドメスティック・サイエンスを「エコロジー」と名づけようとしていた。しばらくの間, リチャーズは, この「エコロジー」という語にこだわり, 「ホーム・エコロジー」と変更しての普及を試みたりした。結局, ヘッケルに端を発した生物学からの「エコロジー」がこの語の意味として定着したこともあり, 断念した。

同じ第6回会議において, リチャーズはさらに, ホーム・エコノミクスを「環境統制 (controllable environment) の科学」と定義し, 自ら名づけた「ユーセニクス (優境学: euthenics)」を高等教育における名称として提唱した。ユーセニクスとは, イギリ

⁴ 実際には, 以下の通り用語を使い分ける方式を採用した。

ハウスホールド・アーツ (Household Arts) : 初等教育 (小学校) での学習

ドメスティック・サイエンス (Domestic Science) : 中等教育の課程

ホーム・エコノミクス (Home Economics) : 大学の学部と大学院での研究

⁵ Stage & Vincenti, 1997, p. 6, 訳, p. 25.

⁶ 森, 2008, p. 42.

⁷ Clark, 1973, pp. 39-40, 訳, pp. 48-49.

スの遺伝学者ゴルトンによって 1883 年に唱えられた優生学 (eugenics) への挑戦として、リチャーズが造った語である。それは、「人間が完全な有機的生命としてその存在を実現するためのよりよい生活の科学」として構想された。しかし、これは、この分野全体、つまり、初等・中等教育を含む分野の名称として受入れることは難しいとされた⁸。

最終的にリチャーズは、「ホーム・エコノミクス」を支持する。彼女は、エコロジー (oecology) とエコノミクス (oekonomics) の語源が同じであること、そして、「エコロジー (oecology) が「生産と消費の行われるすべての人の家」であるのとちょうど同じように、エコノミクス (oekonomics) は生産と消費に関するすべての人の体系である」ことを理解していた。さらに、彼女は、アメリカの科学を支配し経済的権力をもっているのは男性であるが、消費支出の大部分を支配しているのは、自分たちの「生活の場」の改善を目指している女性であり、政治的な市民権はなくとも、消費を担うという意味で、女性の経済的な市民権は現実的なものであると考えた⁹。こうして、リチャーズのエコロジーは、「経済的な市民権」をもつ女性たちの家庭生活と消費を扱う科学として、ホーム・エコノミクスという名を得たのである。

もっとも、この後 10 年間のレイク・プラシッド会議では、より良い名称の模索が続けられた。それは、①この分野を第一義的に社会学的で経済的なものとみなす人びと (ホーム・エコノミクス/ドメスティック・エコノミーの支持者)、②化学や実験室とより緊密に結びついているとみなす人びと (ドメスティック・サイエンスの支持者)、③女性の家庭内の責務と関連したものとしてより伝統的な用語のなかで判断する人びと (ハウスホールド・アーツの支持者) の間に緊張があったことに由来する¹⁰。

ハウスホールド・アーツの支持者たちは、「家庭の仕事を洗練させる技術を教育する分野」としてこの領域をまとめようとした。それは、ビーチャーやその後のレイク・プラシッド会議の時代に主流であった、「理想の家庭」像を受入れる立場であったともいえる。それは、家庭が、女性である妻の自己犠牲によって成り立つ物質的な空間であるにもかかわらず、あくまでも男性の権威の統制下にあることを強調する主張であった。しかし、リチャーズは、家庭の定義を拡張し、女性の領域を公的な家事へと結びつけようとした。そして、リチャーズや彼女に同意する人びとは、「消費者としての女

⁸ しかし、第 8 回会議において、優境学は再びトピックとなり、次のように定義された。「優境学は人類がその天性の充実した本質的な生活を営むことができるように、生活状態をよりよくするための科学であり、よく知られた原理を実際に適用することから成り立っている」[今井・紀 1990, p. 89]。

⁹ Clark, 1973, p. 173, 訳, p. 214.

¹⁰ Stage & Vincenti, 1997, p. 6, 訳, p. 25.

性の新たな役割を強調」することによって、家事や部屋の装飾ではなく、経済問題や社会問題に焦点を当てようとした。

結局、当初選択されたホーム・エコノミクスという名称が変更されることはなく、第10回会議において、リチャーズは、名称がもつ意味を次のようにまとめた¹¹。

「ホーム・エコノミクスのホームとは庇護の場、子どもの養育、自己犠牲に耐える人格形成、外界に対処しうる能力の開発の場を意味し、エコノミクスはそのホームのマネジメントを意味する。」

最終的にホーム・エコノミクスは、異なる目標や対象をもつ家庭生活に関する個々の教育内容を総合し、体系化することを目的とするものとなったが、名称決定における議論に象徴されるように、さまざまな活動に従事する人びとが、自分たちの活動や思想を組織の中心に置こうとする傾向も見られた。そのなかで、発起人としてのリチャーズは、そうした利害の対立を解消させ、一方向へまとめあげる存在であった。リチャーズ自身、ドメスティック・サイエンスやエコロジーといった名称へのこだわりを捨てるなど、自分たちが理想とした組織をつくりあげるための妥協も辞さなかった。結果として、ホーム・エコノミクスは、リチャーズが目標とした、人びとの生活を改善するために科学知識を応用することに取り組む領域として成立したといえる。

ここで注目したいのは、リチャーズが、ホーム・エコノミクスという名称を支持する際に注視したこと、すなわち、エコノミクス（経済学）が生産と消費の科学であると理解し、ホーム・エコノミクスの目的を、「消費」を担う女性たちにより高度な科学的知識を授け、より良い生活を目指すこととした点である。リチャーズのこの発想は、ホーム・エコノミクスが消費の科学であることを自覚したことを示している。ここに消費経済学とのつながりが見出せるのである。

II. 「消費経済学」の源流

消費経済学が、ホーム・エコノミクスと関連していたのは、とりわけ、ヘーゼル・カークのような、経済学部とホーム・エコノミクス学部で教鞭をとった人物が居たことから見て取れる。彼女は、ホーム・エコノミクス学会にも所属していた。しかし、カークが実際に自分の消費経済論、家庭経済論において参照したのは、ホーム・エコノミクスの観点ではなかった。それは、経済学の理論やアメリカの社会学や心理学、そして、イギリスの美術評論家・社会批評家であるジョン・ラスキンの消費重視の経済思想であった。

¹¹ 今井・紀, 1990, p. 93.

ジョン・ラスキンの消費重視の経済論は、経済学が科学となるために削ぎ落とした「消費」に意味を見出そうとしたものであった。さらに、産業化が進み、物質的豊かさが増す中で、人びとの文化的な生活や人間らしさ(これらは、Life という単語で表される)と結びつくような消費を理想としていた。ラスキンの思想においては、消費者が女性であると限定されていない。しかし、彼が消費主体を「家庭」と考えていたこと、それに彼の女性論における主張、すなわち、「家庭」を取り仕切る役割は女性にあると考えていたことを重ね合わせ解釈すると、「消費主体としての女性」という像が浮かび上がる。すなわち、ラスキンが経済活動として重視した消費とは、女性の役割に新たな光を当てていたといえる。ここに、消費を通じた女性と経済学的知識との関連を見出すことが出来るのである。

III. おわりに

ホーム・エコノミクスにおけるリチャーズおよび消費経済学とその思想的背景にあるラスキンは、「消費」に関する問題を共有していた点で関わりを持っていたといえる。そして、その主体である消費者を女性と捉えていたという点も共通する。

しかしながら、このような共有点・共通点は、ホーム・エコノミクスと経済学との直接的つながりとは必ずしも言えないだろう。ホーム・エコノミクスに対する経済学理論の導入をみる限りにおいて、1908年のAHEA設立後の展開、すなわち、ホーム・エコノミクスを形作る際に影響力があったリチャーズが1911年に死去して以降、ホーム・エコノミクスの方向性がレイク・プラシッド会議で自覚されたアイデンティティとは異なっていたといえるからである。つまり、リチャーズの意図した「生産と消費の科学」という経済学的観点をふまえ、消費を担う女性に科学的な知識を授けることに力点をおいたものには必ずしもならなかったのである。

以上のように、20世紀初頭のアメリカにおいて、女子教育としてのホーム・エコノミクスが、科学的知識としての経済学(エコノミクス)を取り入れ、自らの分野を洗練させようとしたことがわかった。しかし、ホーム・エコノミクス設立の際に意図したような経済学の導入が、実際にはプランのみで終わったと言える。しかしながら、紙幅の都合上、本稿では触れられなかった、消費経済学からのホーム・エコノミクスへのアプローチについての検証も必要である。報告ではこの観点についても触れることとしたい。